
さよならシャンプー

明須久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならシャンプー

【Nコード】

N3171K

【作者名】

明須久

【あらすじ】

僕には行きつけの美容院がある。試験前日のある日、僕は試験勉強からの逃避で髪を切りに出かけた。自転車で4、5分のその美容院に僕が通う理由は一つだった。

こんなことやってちゃダメだって分かってる。もう明日は試験当日だっていうのに、なんだって僕は髪なんか切りに来てるんだ。

……もちろん逃避だ。

本来やるべきことを後回しにし、別にそのときやらなくても良いことを始めてしまう。試験前掃除の法則ってやつさ。ああ、情けないさ。それでも一向に構わなかった。

僕には行きつけの美容院がある。

ガキのくせに美容院だなんて生意気にもほどがあるかもしれないが、僕にはどうしてもこの店に来なければならぬ理由があった。

家から自転車で4、5分ほどの距離。磨き上げられたガラスで作られたドアを開けると、来客を告げるウィンドベルが僕の頭上で涼やかな音色を立てた。

カランコロン。

「いらっしやいませー」

受け付けカウンターの向こうで若い店員の女性が顔を上げ、気持ちの良い笑顔で出迎えの挨拶をしてくれた。

「ご予約のお名前は？」

いたずらっぽい笑顔を僕に向けてから、まだ答えてもいないのに彼女は受け付け簿に記入を始めた。「知ってるくせに」と僕も同じように笑った。

そう。僕がこの美容院へ通う理由はこのヒトに会えるからだった。

初めてこの店に来たのは1年前の夏。偶然通りかかった店の前か

らガラス越しに彼女の姿が見えた。お客さんとにこやかに世間話をしながら、手元では踊るようにカットする彼女のハサミ捌きに、僕はしばらく見とれていた。

でもそのときは僕は店には入らなかった。それどころか僕はその後しばらくも、店に入る勇気が出せなかった。なぜならそれまで床屋通いだっただ僕にとって美容院というのは何か異質な、足を踏み入れがたい領域だったのだ。

しかしその後、友人の一人がこの店に通っているのを知り、紹介してもらって通い始めたのだった。この店には紹介制度というものがあり、知人を紹介することに割引チケットがもらえるので友達も喜んでいた。

「今日はどんな髪型にするの？」

「あ……ええ、いつも通りでいいです」

「そう？ たまには冒険してみればいいのに」

しばらくボーっとしていたらしい。生返事をしてから僕は軽く頭を振った。いつの間にかシャンプーチェアに座らされており、鏡越しに彼女が笑いながら小首をかしげていた。

「疲れてるみたいね」

「うん、このところ試験勉強が続いて」

「そうなんだ。大変ねえ……あたしも学生の頃は嫌いだったなあ試験」

「はは、好きな人なんていないんじゃないの？」

笑いながら僕が言うと彼女は困ったような不思議な笑顔を作りながら言った。

「それがねえ、居るのよこれが。高校のとき同じクラスのヤツだったんだけどそいつがまた勉強好きでねえ……」

彼女がそんな風に笑うのを今まで見たことがなかったし、そんな

風に話すのも僕は聞いたことがなかった。そのとき、僕は鏡に映る彼女の右手に指輪を見つけた。

いや、鏡に映っているから左手なんだと気づいたとき、僕の口から自然に言葉がこぼれた。

「その指輪……」

「あ、いけない。仕事なのを外すの忘れてたわ」

あわてて指輪を外した彼女は、それを愛しそうにポケットに仕舞った。

「実は高校卒業したときから付き合ってるのよ、そいつと」

照れながら話す彼女は、僕の座る椅子をゆっくりと倒してシャワーからお湯を出し始めた。

「こんな話するの、恥ずかしいなあ」

その後も彼女はいろいろと話し続けたが、その間僕は何も言わなかった。シャンプーが終わる頃にようやく話が一段落すると、僕は口を開いた。

「丸坊主にしてください」

「え？」

「丸坊主にします」

「ほ、ほんとに？ それちょっと冒険しすぎじゃない？」

驚いて笑っていたが、僕の表情を見ると彼女の顔からも笑顔が消えていた。彼女は真面目な顔つきでバリカンの用意を終えると、無言で作業を始めた。

僕の髪が徐々になくなっていく間、二人とも何も言わなかった。ただ、途中で彼女が小さな声で「ごめんね」と呟いたのが僕には聞こえた気がした。

バリカンで頭を刈り終えた後、細かい髪を洗い流すために再びシャンプーをしてもらう。そのとき僕は、これが最後となるだろう彼女の手のぬくもりを、頭皮の向こうに感じていた。

このぬくもりは、おそらく生涯忘れないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3171k/>

さよならシャンパー

2011年1月15日23時00分発行